
。＋・＊桜の木の下で＊・＋。

美空遊衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。十・＊桜の木の下で＊・十。

【Nコード】

N0830J

【作者名】

美空遊衣

【あらすじ】

主人公…美乙^{みこ}には大親友の、劉^{りゅう}・優一^{ゆういち}・妃美架^{ひみか}がいる。4人は幼稚園の頃からいつも一緒だった。そんな4人がある日…!!?!

0

雪の降る日。

私はいつもあの人達を思い出す。

毎日毎日一緒だったのに。

なんで“そちの道”を歩んでしまったの？

いつもそう、

思ってた。

でもいつしか私は、

2人が“そちの道”を歩んだ理由が、

やっと、

分かってきたんだ。

ある日私達は、

再会する事が出来たよね。

みんな成長してた。

もおお酒が飲める位に。

再会した後は、

又みんなで遊んだね。

私はどれだけ遠回りして、

2人と再会する事が、

出来たのだろう。

一回2人と再会する事を諦めた事があった。

でも、

貴方のおかげで諦めずにいられた。

そして、

2人と再会出来た。

毎日一緒に過ごせる様になった。

また、

4人で一緒に過ごせる様になったんだよね。

私の宝物は

“仲間”。

心からそう言えるよ。

1

「ピ
ピ
ピ
ピ
ピ」

•
•
•
○

「ピピピ」

$$\begin{matrix} h \\ | \\ \vdots \\ \circ \end{matrix}$$

「
ヒ
ヒ
ヒ
ヒ
」

「あー！！もおうるさいっ！！」
ダン！！

目覚まし時計を勢い良くとめた。

「ギャーーーーーあ!!!!!!!!!!もおこんな時間!!!!!!!!!!?」

「早くしないと遅刻するよお!？」

お母さんがリビングから叫んだ。

「分かってるう!! いってきまあすつ!!」

「え!?!? ご飯は!?!?」

ボタン！！

おはようございます！！

私、祐天寺 美乙は

“姫ヶ丘小学校”に通っている小学6年生です。

もお、早いもので今は3月。

後何日かしたら卒業です。

「おせーよ!! もっと早く起きろよな!!」

と、言ったのが南条 劉。

意地悪だけど本当は優しい男の子。

「はいはい。ごめんなさいね。」

「んだよ、その言い方!!」

「「おはよー!!美乙!!」」

と、言ったのが坂桐 妃美架と本城 優一。

妃美架はキレイで優しい女の子。

優一はいつも冷静沈着で、優しい、男の子。

「おはよー!! 妃美架、優一! 劉なんかほっというて早く行こ!!」

「なんだとお!!?」

劉とはいつもこんな感じで、ちよつとした口喧嘩が多い。

「ねえ!! みんな! 春休みになったらどっか行こおよ♪」
と、私。

「「良いねえ!!」」

「じゃー、何処行く? 今から予定立てないとだよね?」

「そーだ!! じゃー、“桜の木” 見に行かね!!?」

と、劉。

「「えっ!!」」

「もつと他のところ行かね?」

うんうん。

「だってほら! “桜の木” って言ったら俺等の思い出の場所だろ?
だから、“桜の木” が良いって!!」

「そーかあ。じゃー俺も“桜の木”一票。」

「あたしも!!」

「うちも!!」

“桜の木” は私達にとって大切な場所。

私達は、××市××公園にある大きな“桜の木”の下で、良く遊んでいた。

そして、その“桜の木”の下にタイムカプセルを埋めた。それと、後もう1つ。

“大切な家族”が眠っている場所。

だから私達にとっては、大切な場所なんだ。

＊

＊

＊

♪キーンコーンカーンコーン♪

一時間目が始まるチャイムが鳴った。

「席着けー！！！HR始めるぞー！！」

ガタガタ

みんなが席に着いた。

「今日は小学校で最後の席替えをするぞー。メンドイから自由で良いけど、班員数は決めるぞ。」

「「えー！ー！！！」」

「自由なら全部自由にしろよお！」
と、劉。

「それが出来ないから言ってるんだろ！！センセーだってな、出来ることなら自由にしてやりたいさあ。けどな、校長が駄目って言うんだよ。だから我慢しろ。」

「ちえー。」

＊

＊

20分後

＊ ＊

「良かったね！！４人班の席取れて！！」

「そーだね！！」

私達は見事４人班の席を取れた。

私達のクラスは全員で３０人。

４人班が２つ

５人班が２つ

６人班が２つ

という振り分けになっている。

「俺に感謝するんだな！！」

劉がいきなり私達の話しに割り込んできた。

「はあ！！！？なんであんたに感謝しなきゃいけないの！！！？」
と、私。

「だって俺が一番早くこの席に着いていたから、４人班が取れたんだぞ！！！？」

「でもそれだけじゃん。」

「それだけってなあ・・・」

「はいはいはい！！終わり終わり。いーじゃん、４人同じ班になれたんだから。」

と、優一。

「そーよそーよ。」

私と劉は、いつもちよつとした事で口喧嘩を始める。

前はこんなに口喧嘩なんてしなかったのに…。

＊

* * *

2

〽卒業式前日〽

「もお卒業式前日だね!!!!!!」

私達6年生は

明日の卒業式の順備をするために
体育館にいる。

「どーして主役の俺等がこんな事しなきゃなんねんだよ!!」

「そーだよ!! 劉のゆーとーりだよ!!」

「あら、珍しく気が合ってるじゃない? 笑」

妃美架がニヤニヤしながら言ってきた。

「うるせーよ…。」

劉が少し顔を赤くしながら言った。

＊

＊

＊

＊

＊

順備が終わり、みんなで帰ろうとしていた時、

「なあ!! 優一と美乙、今日時間あるか??」

と、劉が真剣な顔で言ってきた。

私達2人は、無言で“コク”っとうなずいた。

「ちゃー!! 1時間後に集合な!!」

「「ちゃーねえ」」

「ねえ、なんだったんだろおね。劉があんな顔見せるなんて…。よっぽどの事なんだね。」

「だろーな。」

私達は、途中で右に曲がる人と、左に曲がる人がいる。

私は、優一と一緒にの方向で、家が隣同士だ。

「なんか様子変だったね。なんか、怖くなってきちゃったなあ！」

「・・・ちゃー、又後でな。」

「うん。」

ガチャ

家のドアを開けた。

私の嫌な予感なんて、ちっとも当たった事が無い。

けど、優一の予感は結構当たっちゃう。

だから、それが怖いんだよね・・・。

＊

＊

50分後

＊

＊

「優一！！！」

「おう！来たか。」

私達是一緒に待ち合わせ場所まで行くことにしていた。

「んぢゃー、行くか？」

「ん。」

＊

＊

10分後

＊

＊

「2人とも早いね!!」

と言いながら、劉と妃美架が駆け寄って来た。

「オメー等がおせーんだよ」

「ごめんごめん。」

「んで、話してなんだよ。」

「うん…。」

劉と妃美架が顔を見つめ、頷き合っている。

そして…。

「俺等私立中学に行くんだ。」

と、言った。

え…？

「だから、2人とは同じ学校じゃないんだ。」

劉は、

何を言ってるの？

意味が、分かんないよ…。

「黙ってて、ごめんね？」

妃美架も行っちゃうの…？

優兄い？

なんで…？

優大とは優一の兄で今は中学2年生だ。

「な、泣いてなんかないし。」

目を擦りながら言った。

「劉達の事か？」

え…？

「なんで知ってんの？」

「お前等より先に教えてくれたんだ。」

それで、美乙がきつと悲しむだろーから慰めてやってっさ。」

「そーだったんだ。」

「ん。」

ギィ

優大が隣りのブランコに座った。

「なあ。なんであいつ等私立受けたんだと思う？」

「親とかじゃないの？」

「俺も一度はそお思ったんだけど、聞いたら自分から受けたいって言っただけ。」

え…？

「な、なんで…！？」

「あいつ等…、夢があるんだってよ。医者ってゆう夢が。」

「で、でもそんなの高校から考えれば良いじゃん!!」

「俺も同感。でも、いち早く、誰よりも早くになりたいらしいんだ。それで、調べたら、あいつ等の行く学校が見つかって、その学校を調べたら、医者の特門コースがあって、だからそこに決めたらしい。そこは、大学院までエレベーター式で行けるらしいよ。」

でも、だったとしても・・・

「高校からじゃ駄目なの・・・?」

「なあ。スッゲー最高の奴が夢追うから海外行く。って言ってきた時は、まじ泣きした。」

でも、最高って思える奴の夢、俺がぶち壊したら、駄目なんじゃないか? って、いつの日か思えてきた。

お前にも、そお思える日が来るんじゃないの?」

そっか・・・。

「そんじゃ、俺用事あるからさき帰るよ。じゃーな。」

あたし、

「うん。ばいばい。」

間違ってた。

「それにまだ1人じゃない。優一がいる!」

そーだよ!!

1人なんかじゃない!!!!!!

2人が隣りにいなくても、側には優一がいて、心には2人がいる。
毎日会えなくなるけど、会えない距離じゃないし…。

だから大丈夫だね? ————。

3

〽卒業式〽

「みんな。おはよ。」

「「おはよ!!」」

今日は卒業式。

みんなとも別れちゃうけど、新しい生活に期待中!!

「なんか昨日はごめんね。急にいなくなって…。」

「大丈夫だよお!! そんなんで、いちーち気にしないってえ!!」

「そーそ! 俺等なんも気にしてねえって!!」

「だいたいそんな事で謝る仲だったか? 俺等。」

みんなっ!!!!!!!!!!

「ありがとっ!」

「何泣いてんのお!!」

「だってえ!!」

「「あははははははは!!!!!!」」

みんなと毎日笑い会えるのも

今日で最後。

みんな

ほんとーにつー！

ありがとう。

* * * * *

「祐天寺 美乙ー！」

「はいー！！」

「貴方は平成××年――――。これを賞します。おめでとう。」

「おーーーいっ！……！！……！！写真撮ろおぜー！！」

「「うんー！！」

「おう！」

「せんせー！！撮ってえー！！」

「いいぞおー！！」

みんな。

「いくぞー!!」

毎日会えなくなるのは寂しいけど、

「ハイ!!」

頑張るから。

「チーズ!!」

だから又会える日まで、

パシャ!!

元気でいてね。

「うわ!! ちょー良く撮れてんじゃん!!」

「せんせー以外にスゲー。」

「だろ!!?」

「「あははは!!」」

さようなら————。

その日は
なぜか、雪が降った。

く中学入学式く

「おかーさん！！早く早く！！優一に怒られるよお！！」
「はいはい！！今行くわよ！！」

これから“姫ヶ丘中学校”の生徒になります！！
今日は入学式なので慌ててます笑；

「優一！！おばちゃん！！おはよ！！」
「おせーよ。」

「おはよ！！あら、制服似合うじゃない！！可愛いわよ！！」
「そーかなあ…？」

「美津子んとこのお坊ちゃまもお似合いよ！！」
「」

「やっと来たわね、元祖遅刻魔W」

「「あははははは!!」」

「ねえねえ、この制服ほんとに似合う?」

「さあな。でも俺は似合ってると思うけど?」

ドキ

「そ、そお...」

まさか、優一からそんな言葉が帰ってくるとは思わなかったから
ビックリしちゃったじゃん!!

・・・。

あの“ドキ”って、

ビックリの方だよね?

まさか、恋!!!?

・・・じゃないよね笑;。

*

*

*

*

*

*

*

「本城優一!!」

「はい!!」

「祐天寺美乙!!」

「はい!!」

「はいはい!! 写真写真!!」

「優一と美乙ならんでえ!!」

「いくよー。」

「ハイチーズ!!」

パシャ!!

「んぢゃーお母さん達はどっか行つて来るから
あんた達もどっか適当に過ごしてえ♪
じゃあ!!」

「じゃあ・・・?」

行ってしまった。

って事は・・・、

ふ、ふ、2人きりっ!!?

良く考えてみればそんな事あんまり無かったなあ…。

「何処行く?」

「えっ!? 別に何処でも良いよ笑;!!」

「そ、そーかあ? ぢゃー桜の木の下行かね? あの公園の。」

「うんいーよ!」

*

*

＊ ＊

「うわー！！久しぶりい！！」

「だなぁ！」

「何ヶ月ぶりだろ？ここ来たの！」

「んー：3ヶ月ぶりくらい？」

「だよね！！卒業してから行こーって言ってたけど、結局行けなかったんだよね！！」

「そーそ。あいつ等の引越しのせーで。」

2人は今引越ししちゃって、私達が住んでる所より少し遠いんだ。だから、あまり会えなくなっちゃったの。

「やっぱここ来ると落ち着くなぁ！！」

私は桜の木の下に座った。

「そーだなぁ…。」

優一も隣りに座ってきた。

「うーうーん！！ねむい。寝ちやおっかなあ？」

バサ

私は寝転んだ。

芝生だから汚れないよね？

「んじゃ俺も。」

バサ

優一も隣に寝転んだ。

「おやすみい。」

「おう。」

私は眠りについた。

「無防備だなあ…。」

…。

チュっ

ヤベっ…。

「お前が可愛すぎんだよ。バーカ。」

* * * * *

「おお…。」

ん…？

「おい」

え…？

「おい！！」

「わあっ！！誰！！？」

辺りをキョロキョロしていると

「よっ!! 久しぶりだなあ!!」

え・・・?

「劉!!」

「あら? うちの事忘れてない?」

なんで・・・?

「妃美架!! なんでいるの!!?」

「んだよ、うっせーなあ。人が寝てる時に・・・って劉!! 妃美架!! お前等なんで・・・!!?」

「実は今日入学式だったんだけど、どーも暇でねえ。

それでここ行こー!! って話しになって来てみたら、あんっちが寝てた訳。」

「そーゆー事だ!!」

「ヴっ、会いたかったよお!!!!」

「うわ!! お前泣くなよお!!」

「ほんとにいつまでたっても泣き虫なんだから!! こっちまで泣けてくるじゃん。」

「だってえ!! 会いたかったんだもおん!!」

「又4人揃ったな。」

「「うん。」」

「あー。」

「ミルク元気でやってたかあ? 天国はどーだ? 極楽かあ笑?」

「ミールークっ♪そっち行く事になったら又宜しくね!! ずっとさ

きになっちゃうけど…。」

「ミルク。これからも皆の事見守っててくれ。よろしくな。」

「ミルクー！大丈夫？そっちで風邪なんかも流行るの？だったら気を付けてね。」

“ミルク”とは私達が小学4年生頃に拾った捨て犬だ。

色が白くて、まだちっちゃい子犬だった。

柴犬だった。

牛乳が好きで、真っ白だから、“ミルク”と名付けた。

4人共親に飼えないと言われたため、桜の木の下で飼う事にした。毎日毎日最小限の世話をした。

だが、私達が小学6年の春。

ミルクは死んだ。

体中真っ赤にして桜の木の下で倒れていた。

すぐに病院へ連れて行った。

が、間に合わなかった。

真っ赤に染まったミルクを洗い流しキレイにしてから

桜の木の下に埋めてやった。

家族同然だった。

だから、“大切な家族”が眠っている場所なのだ。

「ミルクのお見舞いも済んだし…。そろそろ帰る？劉。」

「そーだな！！遅くなると親がうっせーし。」

「もお帰るの！！？だったら駅まで送るよ！！」

「いや、大丈夫。ここで。送ってもらうと、辛くなるからさっ！！」

「そっか…。じゃー気を付けてね！！」

「うん！！」

「おー！！」

「「ばいばい！！」」

「「じゃーな！！」」

2人の姿が見えなくなった。

「2人行っちゃったね…。」

「ああ。でも又会えるさ! 今日みたいに。」

「うん。きっと…。」

またいつか会える。

「ねえ!! ご飯一緒に食べよう!!」

「いいけど、何食べたい?」

「えー…。」

また、

会える日まで…。

* * * * *

私は夢を見た。

誰かが

私にキスしてきた夢を…。

（中3）

「おはよ！！優一！！優兄い！！」

「おお！！おはよ美乙！！」

「おせーよ。」

「んぢゃ、行こー♪」

「おー！！」

もう早いもので中学3年生になりました。

優兄とは中学生になった時から一緒に学校に通ってます。

中学校が一緒だったのもあるし、

今は優兄は、高校生だけど、高校も中学校とかなり近くにあって、
今も一緒に通ってます。

「ヴ〜〜！！寒っ！！」

「まあ冬だかんなあ。」

「美乙寒いのか？コート貸そおか？」

と、心配な顔で優兄が言ってきた。

「大丈夫だよ！！それに、優兄が風邪ひいちゃう。」

「俺の事はどーでも良いんだよ！！ほら、お前試験前だろ？だから
風邪ひいたら困んじゃない？」

「でも、大丈夫！！！寒くない、寒くない笑！！」

「そっか！なら平気だな！！」

と言いながら、優大はポンポンと美乙の頭をなでた。

あ・・・。

優一みたい・・・。

やっぱり兄弟なんだなあ。

「おい、兄貴！いつまで一緒に学校行く気だよ！！」

「なんで？いつまでもだよ！！ヤキモチちゃん♪」

「う、うっせーよ！」

美乙にバレたらどーすんだよ、この糞兄貴！！

「誰にヤキモチしてんのお？？」

「「へっ！？」」

なんだ、こいつ鈍感だ・・・笑；

「い、いや？別に何でもねえーって！！ね！！？兄貴！！」

「えっ！！？あ、うん・・・」

なんだあ。勘違いか笑
でもお？

「怪しい・・・」

「んだよ。『怪しい』とかゆー目で見んなよ・・・」

「だって・・・怪しすぎる！！」

そうこう話している内に中学に着いた。

「ぢゃー、優兄ばいばい！！」

「ぢゃ。」

「おう！優一！！怪しい事すんなよ笑？」

「どーゆー事だよそれ;」
「まっ、ぢゃーなっ!」

* * * * *

「明日はいよいよ私立入試の日だ。気をしっかり持てよ!! ぢゃ、号令!」

「さよーなら!!」

「「さよーならっ!!」」

「ねえねえ優一、明日どーする?」

「んー、8時美乙ん家。でいいか?」

「うん!! 分かった!!」

私達は明日入試本番なのだ。

志願校は勿論2人のいる“私立乙女ヶ丘高校”だ。

乙女ヶ丘高校は、単願入試でも受かるか分からない、大人気の学校だ。

併願や一般入試は、受からないと言われている。

私達は単願入試だが、受かるか分からないのでとても心配だ。

でも、受からないと後が無いので、今はこの事で頭がいっぱいだ。

「んちゃー明日な。」

「うん！明日ね！！」

* * * * *

「明日は勝負だ…。絶対勝たなきゃ！」

勝たなきゃ…。

く入試本番く

「おはよ!!」

「おー、おはよ。」

「今日で2人と同じ所行けるか決まるね!!」

「でも、落ちたとしても併願があるだろ。」

「併願とかは受からない確立90%だよ!!」?

「10パーン中に入れば良い事だろ。」

「あんね…。その10パーに入れないから、みんな駄目だって言うてんの!!」

「塚、俺等落ちねーから平気だろ。」

はあゝ!!?!

んだ、こいつ…。

「どっからそんな自信が湧き出てくんのよ…。」

「だって俺等あんなに面接練習しただろ? だから大丈夫だよ。」

ポンポン

私の頭を優しく撫でた。

ドキ

ん・・・？
もしかして、
私・・・。
優一のこと・・・。

「だろ？」

優一が何かを疑うような目をしながら聞いてきた。

「う、うん！」

* * * * *

「いよいよ着いちゃったね；」

「あー。」

私たちは乙女ヶ丘高校に着いた。

「こっちで受験番号の確認をしますから、並んで下さーいっ！...！
！」

係りの人が受験生に指示をだしている。

「なんか…、超人多いいね。」

「そーだな。」

「やっぱり、人気あるからだよね…?」
「だろーな。」

それから私達は、受験番号の確認を済まし、指定された教室へ行った。

「なんか緊張してきたぁ!!」

「大丈夫だろ」

「なぁんでまた、そんな自信たっぷり？」

「こーでもしなきゃ俺が弱気になっちゃうんだよ。」

俺が弱気になったらお前、今よりもっと不安になるだろ?」

え・・・?

優一・・・。

私の事心配してくれてたんだ…。

「う、うん!! そーだね!!」

私達は自席に座り、テストが始まるのを待った。
そしてテストは始まり、終わった。

「うー!! 終わったぁ!!」

「まだ終わってねえぞ。」

「えっ!!!?」

「合格発表見てから、終わりだろ?」

「あ、そーだね;」

それから私達は自分の家に帰って行った。

* * * * *

ねえ、みんな？

もし、私がちゃんとみんなと同じ所にいたら、

どーなってたかな？

合格発表

今日は合格発表の日。

「お母さん!! もう行くよ!!?」

「あゝ!! 待って!! もう、よい出来たから!!」

「はあゝ。」

今日は、優一とは一緒ではない。

もし、どっちかが落ちて合格していたら、気まずいからだ。

「はいはい。お待たせ。んじゃー行きましょ。」

「うん。」

* * * * *

＊ ＊

9時30分

“乙女ヶ丘高校”到着。

「うわっ！！凄い人！！」

「そりゃー、人気校だからねえ。」

私達は掲示板を見て、私の番号を探した。

探してる途中、

「美乙のはあったかあ？」

「ん…、まだない…。」

・・・？

男の声・・・？

「えっ！！？」

横を向くと

「優一！！」

「おう！俺のあったから先行くわ。じゃ。」

え~~~~~!!!!!!?!!?

優一の・・・。

あったの・・・?

んじゃー、私のは・・・?

「お母さん!! あったあ!!?」

「ん・・・、こっちは無いわあ!! 美乙の所はあ!!?」

え・・・?

無い?

そんな・・・。

「こっ、こっちにも無かったよ!! 帰ろお? お母さん。」
「う、うん...。」

私達は家に帰った。

* * * * *

＊ ＊

どーしよ・・・。
落ちちゃった・・・。

でもまだ、次がある。

次で決めなきゃ！！

絶対に…。

（併願入試）

今日はいよいよ最後のチャンス。

併願入試の日。

絶対合格しなきゃ。

合格しなきゃいけないんだ…。

* * * * *

「単願のときとは違って、あまり人が居ない…。」
「そりゃそーでしょ。皆単願で受かったちゃってるんだから。」
と、言ったのが私の中学の友達、椎葉^{しいば} 愛美^{まなみ}。

愛美とは、中1の時からの中で、とっても頼りがいがあった、優しい女の子。

「そーだよね…。」

「んぢゃ、教室行きますか!」

「うん!!」

そーこー話している内に、試験会場に着いた。

「あたし1の2だ。」

「あ、うち1の3。」

「ぢゃー全教科終わったら、1の2と1の3の境目の廊下で待ち合わせね!!」

「うん、分かった!!ぢゃーねー!」

「又後で!!」

* * * * *

「ではこれから、国語の問題用紙を配ります。」

いや～～～！！

緊張するっ！！

でもこれをハズしたら、

もう後が無い。

だからちゃんとやらなきゃ！！

私、頑張るからね。

優一、劉、妃美架。

待っててね。

* * * * *

「キンコンカンコン」

「はいでは、これで解散です！！お疲れ様でしたー！」

ガタガタ

皆一斉に席を立った。

私は愛美との待ち合わせ場所へ向かった。

「愛美い！！緊張したよお！！」

「うちも！！どーだった？良く出来た？」

「数学駄目だった…。」

「そっかあ。でも大丈夫でしょ！！美乙なら合格できるよ。」

「ホントお??？」

「うん！！」

「良かったあ！！愛美に言われると、安心する！」

「なんでえ??意味分かんない！！」

「「あはははははははははは」」

こんなことを話している内に、私の家に着いた。

「ぢゃー又明日学校でね！！」

「うん！ぢゃ。」

「ばいばあい！！」

* * * * *

あ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！
！
！
！

数学がああ！！

失敗した。

でも大丈夫だよね？

愛美言ってたもん！！

大丈夫だって。

平気だよね？

みんな…。

合格発表

「おはよ!! 優一。」

「おせーよ。」

今日は発表日。

今日は土曜日だから、

優一と行くことになったの。

これに合格出来たら2人に会える。

又4人で笑える日が来る。

このために頑張ってきた。

でも乙女ヶ丘高校は、偏差値が高い。

だから合格しているかは、

少し不安。

「大丈夫だよ。ここまで凄く頑張ってきただろ?」

私の不安に気づいたのか、優一が言った。

「うん…。」

「だったら大丈夫だ。お前は受かるよ。」

と、言いながら優一は、私の頭を
“ポンポン”
と、優しく撫でてくれた。

私は優一に撫でてもらうと、
とても落ち着く。
不安が無くなる。
昔からその優一の魔法の手が、
大好きだった。

あれこれ話している内に、
高校に着いた。

合格してるかなあ？

そんな風に思いながら私達は、
合格者の番号が並ぶ、
掲示板を見て、
私の番号を探した。

「あったかあ？」
「うーん…、なあい。優一は？」
「いや、まだ見つかってない。」
どーしよ。

このまま無かったら・・・。

私・・・。

ギユ

え・・・？

私が泣きそうになった時に、
優一が手を握ってくれた。

「大丈夫だ。もっと良く探すぞ？」
「うん。」

その後も優一と手をつなぎながら、
満遍無く探した。

だが、

無かった。

私は涙をこらえて

家に帰った。

＊ ＊

* * * * *

「なあ、俺ん家来ねか？」

「え？別に良いけど・・・。」

「じゃーぱあつとやりますか!!」

「え？で、でもあたし達お酒飲めないよ!？」

「はあ？馬鹿だなあ、ジュースに決まってるだろ。」

「あつ、そっか。」

それから私達は、

ジュースとおやつを買いに、

お店に行き、優一の家に行った。

ガチャ

「お邪魔しまあす!!」

「・・・」

「あれ、おばちゃんは？」

「あー、今日居ねーよ。」

え？

「そーなんだあ。」

って事は

2人きりいい!!?

2人きりなんて初めてだよ。

だっていつも4人だったから…。

んー・・・、なんか分からないけど

緊張する・・・。

「俺の部屋行く？」

「え？あ、うん!!」

優一の部屋久しぶりだなあ。

ガチャ

「入って。」

「うん。」

ガチャ

パタン

「何突っ立ってんの？いつもの所座れば？」

「あ、うん!!」

私はベッドに座った。

いつもは、妃美架と私がベッドに座ってて、劉が床で、優一がクルクル回る椅子に座ってるんだ。

「何でスクバ（スクールバッグ）持ったまま座ってんの？いつもの所置けば？」

「あ、そだね！！」

私はバッグをドアの横に置いた。

「なあ、お前緊張してる？」

「へっ！！？」

「あ、やっぱりな。」

バ、バレた！！

「だってえ！！2人って、初めてじゃん！！おばちゃんも居ないし…。」

「ははははは！！！！別になんもしねーから平気だよ！！お前ホント笑えるな！！ははは！！！！」

「そんな笑わなくても良いじゃん！！」

「ははははあ！！！！まあいいや！！ほら。お前の分。」

コト

優一は私のコーラを机の上に置いた。

「うん、ありがとう。」

* * * * *

それから私達は
夕方過ぎまで語り合った。

「今日はありがとね。」

「又悲しくなった時は来いよ。隣なんだから。」

「うん!!ばいばい!!」

「じゃー又明日。」

* * * * *

ごめんね。

みんな。

私、

みんなと同じ所、

行けなくなっちゃった。

でも、

私達きつと又4人で

笑い合えるよね？

～卒業式～

「んじゃ行つてきまあす!!」

ガチャ

「おはよ!!」

「おせーよ。」

私は、

乙女ヶ丘高校に行けなかったから、
優兄と同じ、公立の“姫ヶ丘高校”に行くことになりました。

「今日で一緒に行けるのも最後だね。」

「あー。」

「写真撮ろーよ!!」

「いいよ。」

「ハイ、チーズ!!」

パシャ

「現像したらあげるね!!」

「おう」

それから私達は
卒業式を終えた。

* * * * *

ねえ、みんな？

又4人揃わなかったけど、

又いつか会えるよね？

4人であの

桜の木の下で、

いつか又会えるよね？

又あの日の様に・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0830j/>

。＋・＊桜の木の下で＊・＋。

2010年10月9日04時22分発行